



特集 スクールドッグのいる学舎に 東洋英和女学院小学部



鳥居坂の上、緑にかこまれた学舎に、とびきりの人なつっこさで子どもたちをむかえる1匹の犬がいました。キャラメル色の毛並みがやわらかいオーストラリアン・ラブラッドゥール。子どもたちは、Eの字のついたANNEと呼んでいます。アンは、学院ゆかりの村岡花子さんの訳した「赤毛のアン」から名付けられました。なんともこの学舎にふさわしい女の子のなまえです。



アンのいる教室

2025年4月、オーストラリアから来た小さな犬が東洋英和女学院小学部に登場しました。スクールドッグの受け入れを進めた吉田太郎小学部長(小学校長)が自宅で飼育し、毎朝一緒に通勤して、登校する子どもたちを入り口で迎えるところから1日が始まります。

休み時間に部長室のドアが開いていれば、アン目当てに子どもたちが集まります。部長が担当する聖書の授業では、一緒に教室に向かいます。途中の廊下でも、教室の机の間を歩いても、子どもたちがアンに触れて歓迎します。教室では、最初の数分間がふれあいタイム。床のシートに落ち着くと、騒いでいた子どもたちも、部長の話に集中していました。

アンの贈り物

オーストラリアン・ラブラッドゥールは、アレルギーのある人向けの介助犬として、1980年代に開発されました。毛が抜けない、吠えないという特徴に加え、陽気さやフレンドリーな性格も兼ね備えています。その人なつっこさは、初めて会っても、まるで自分の飼い犬と錯覚するほど心地よいものでした。

アンの親はセラピードッグのトレーニングを受け、実績を積んでいました。アンもその資質を受け継いでいます。セラピードッグは、高齢者や患者の心と体の機能回復を補助する活動をしている犬です。部長は、前任校でスクールドッグ導入の経験をお持ちでした。

「犬がいたら集中できないのではないかともしやられた。でも、実際にやってみてもそんなことはなかった。犬がいるから、かえって騒がない。子どもは、私が話を始めると、犬を見なくなるんです」

学院のアンも、そこにいっただけで、教室で学びたいという意欲、緊張も不安もない穏やかな時間を子どもたちに届けているのです。



部長室にて吉田部長とアン。

アンは人が大好き

学校で飼育するのではなく、部長が自宅で飼育し、一緒に登校します。

部長は、スクールドッグの実績のあるオーストラリアへ行き、現地の学校やブリーダーを訪ね、アンに出会いました。現地の子どもたちにきてもらっていくつかの個体の中から選んでもらった時も、この子が選ばれたそうです。

「セラピードッグと言ったほうがわかりやすいので



心通わせながら、いつもこうして授業に向かうのです。

すが、アンはセラピーというよりウェルビーイングがふさわしいと思っています」

ともにいるだけで、心身の調和や充足感をもたらしてくれる存在です。アンは部長のもとで基本的な訓練が続いています。それは、かわいがりながら、育て、遊ぶこと。セラピードッグの人間好きという資質も、こうした愛情を受けながら育まれていくのでしょうか。アンのいる登校風景をこのまま一枚の絵画として心にきざみ、いつまでも残したいと思った朝でした。



シンボルツリーのタイサンボク

何代もの卒業生の思い出の込められた校庭のタイサンボクです。中程の黄色の線は、子どもたちがのぼってもよいライン。ふつうは幹が高く伸びるのに、長い間子どもたちがのぼり続けてきたから、このように広がったようです。直近に迫った六本木5丁目の再開発。部長は、子どもたちの思い出に、なんとしてもこの木を残したいと奔走しています。

取材協力

吉田太郎、馬淵智子、楠山眞里子(敬称略)
東洋英和女学院小学部(港区六本木5-6-14)

参考

吉田太郎『学校犬パディが教えてくれたこと』、金の星社、2016年

麻布ひと

未来へ残したい麻布の声

モデル・女優・歌手
こばやしあさみ
小林麻美さん

小林麻美は港区在住20数年。モデル・女優・歌手として一世を風靡し、結婚出産を機に37歳で芸能生活に終止符を打つ。しかし4半世紀振りに再デビューを果たした。現在は、公益財団法人 日本服飾文化振興財団の評議員を務め、ファッションモデルとしても幾多の雑誌を飾る。都会的で洗練されたファッションで、品格ある麻布ひととして「女性が女性に憧れる」ロールモデル的な生き方をする彼女を語ってみたい。



©1976 PARCO

伝説のお洒落ミューズ

芸能活動

彼女の麻布への接点は、普連士学園中等部に入学した折、六本木交差点の側にあった英会話学校に通い始めたことに始まる。

高校1年生のとき、大病を患い長期入院生活を送る治癒後、文化人の子息が多く在籍し感性豊かな人間を育てるという自由・知性・芸術の象徴であった文化学院に転入する。その後、日比谷みゆき座でスカウトされ、ライオン歯磨のCMガールに起用される。18歳の時、「初恋のメロディー」で歌手デビューする。同期には、麻丘めぐみたちがいた。当時のアイドルたちは明るく無邪気な笑顔で歌うが、暗い印象のある彼女はアイドル歌手には不向きでシングルを数枚発表した後、活動は自然消滅した。

脚光を浴びるのは、資生堂やパルコ等のCMに起用されてからである。資生堂のCMでは、着物姿の凛とした表情が美しい。特に伝説のアートディレクター石岡瑛子さんのプロデュースしたパルコのCMは衝撃だった。華奢でアンニュイな彼女は、赤いイブニングドレスを纏い淫靡と退廃を見事に表現した。「野獣死すべし」「真夜中の招待状」等の映画にも出演する。

彼女に訊いた事がある。「当時アンニュイなモデルと云われたけど演技だったの?」「暗い女の子だったから(笑)、素のままだったの」と微笑んだ。1984年イタリア歌手ガゼボの「I Like Chopin」をユーミン(松任谷由実)が日本語で作詞しリリースした「雨音はショパンの調べ」を彼女が歌い大ブレイクする。双子のように仲の良い親友ユーミンが彼女に歌うよう後押ししたのだ。この歌をカバーした歌手たちもいたが、ガゼボは「この曲にマッチするのは、麻美のウィスパーボイスだ」と大鼓判を押した。飯倉片町のキャンティ隣りにあった所属事務所の方針で、音楽番組には出演しなかった。そのことでかえって「伝説のミューズ」の伝説が生まれたのかも知れない。

引退・子育て・結婚生活

引退後は、家庭オンリーの生活で、ママ友との付合はあっても芸能界とは無縁であった。「私ね。子どもが学校から帰ってきたら『おかえりなさい』と言える普通の家庭に憧れてたの。両親は仕事で忙しくて、7歳年上の姉は、結婚して早く家を出た。だからいつも孤独だったの。淋しさを紛らわしてくれたのが読書と映画鑑賞だったわ」

仲間たちとお茶してる時でも、子どもから連絡が入るとすっ飛んで帰る彼女の姿があった。

憧れたイヴ・サンローラン

初めてサンローランのサファリジャケットを買ったのが18歳の時だった。トレンチコートが特にお気に入りだった。彼は60年代「既存概念と闘うべきだ」という信念からプレタポルテとしてパンツスタイルのスーツを発表した。彼女は、覚悟を持ってそれを着る決意をした。ところが、10年程前に、買い集めたイヴ・サンローラン約200着を思い切って日本服飾文化振興財団に寄贈してしまう。

「思い出の詰まった服だけど、着る機会が少なくなったし、財団の役に立つならそれもありかな!って思ったの」「200着も?今までどれだけ注ぎ込んだの?」「働いたお金を全部よ」と屈託なく微笑む。



現在は、黒と白を基調としたファッションでシンプルに着こなす。アディダスの黒のキャップに、リーバイスの白のデニムで現われたりする。

ペットロス

彼女はシロちゃんというスピッツを飼っていた。「私ね、シロが横に居て読書している時間が心が一番穏やかなの」と言う。私が愛犬を亡くし酷いペットロスに陥った時、「もう死ぬかなー」と連発してたようで「そんなの死ぬ死ぬ詐欺よ」と彼女特有のジョークを連発した(笑)

「でも麻美ちゃんもペットロスになるかもよ」「どうかなー、自信ないかもね」

案の定、彼女もペットロスに陥った。自分の命より大切に育ててしまう彼女の生来の動物へのテンダネスは、動物愛護活動にも積極的で兎、猫、犬へと果てしが無い。



ドッグカフェでペットロスを癒す。

25年間のブランクから再デビュー

ライフスタイル誌「kurnel(クウネル)」で再デビューを果たし、次々と誌面を飾る表情は長い人生経験と人生観からくる自信に溢れている。人生の節目節目に潔い覚悟を持てる女性なのだ。人は老いると楽な洋服や歳相応の格好を好みがちだが、彼女は流行や老いに関係なく「心の趣くままに服を着る」と語る。小林麻美を知る世代は彼女と重ねて自身の若い頃の輝きや辛さを懐しむ。彼女を知らない世代は、彼女を観て大人としての自由な表現力の凄さを感じるだろう。「ファッションって、自分を主張する強さと自信を生み出すのかなー、私は个性的に生きたい。だからファッションは、私を私なりに表現してくれるツールなの、体型もデビュー当時と同じなのよ」と語る。



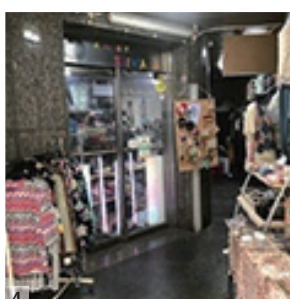
デビュー当時(左)と現在(右)。サイズの変化はゼロ。デビュー時の輝きを保ち続ける。

これから的小林麻美

ある時、思想家・中村天風の本を小脇に抱えて現われた。「時々、これ読み直してるのよ」

およそ彼女に似つかわしくない本だと思っていたが、人生の生き方を説く本だから彼女はこの本で自身の生き方を再確認していたのだ。若さは光陰矢の如しだが、老いていくに連れ、自身の人生観・死生観をしっかりと身に付け、その確認をしっかりと続けることで人の魅力は増していく。そんな彼女は自分に正直に、ファッションに限らず好きな事を極めながら、品格ある麻布ひととして輝き続けるだろう。

(文/鍵谷芳勝)



小林麻美が通った今も残っている店、①瀬里奈本店(神戸牛、蟹しゃぶ)、②シシリア(薄くて四角いピザ、グリーンサラダ)、③香妃園(とり煮込みそば)、④石渡商店(手編みの毛糸玉を求めて)



大使を訪ねて 麻布の"世界"から



国章の説明：ハイチの国旗の中央にはパームツリー・大砲・旗などが描かれていてとても具体的で、カラフル。1803年5月18日に作成された。

日本への関心度が高く、母国の発展を願い 国の親交を大切にされる大使

ハイチと日本は、2026年外交関係樹立70周年という節目の年を迎えた。それを機にルイ・ハロルド・ジョセフ特命全権大使(以下、ジョセフ大使)を、ここ麻布地区総合支所にお招きし、大変魅力的で貴重なお話を伺うことができた。

その歴史は古く、1803年5月18日に自由・団結・独立を強く表すデザインが採用され、翌1804年世界で初めて黒人奴隷が自らの力で独立国家を誕生させた世界史上希有の国である。ジョセフ大使は、国旗そのものがハイチ国家の誕生を象徴するものであり、ハイチ人にとって最も誇り高い存在であるとともに、国民から広く愛されている点を特に強調されていた。

また団結の象徴でもある5月18日の「国旗の日」は、国旗を掲げて行われるパレードなどにより、国内だけでなく世界中のハイチ系コミュニティでも祝われている。学校においても、教師が国旗の色の意味や独立の歴史を丁寧に伝えることで、子どもたちは自分たちのルーツへの誇りを強く感じるようになっていく。そのため、この日は多くの子どもたちにとって「一年で最も好きな祝日の一つ」と言われている。

外交関係樹立70周年

日本とハイチは、友好関係の発展に尽力してきた。約70年にわたり続く友好関係のもと、ジョセフ大使ご自身も様々な取り組みを行っておられる。

貿易分野では、かつては繊維製品が中心だったが、現在ではコーヒーやココアといった農産品の輸出にも力を注いでいる。

大坂なおみ選手の父親はハイチ出身！

ハイチでは、1974年のワールドカップへの出場や2026年の大会出場に見られるように、サッカーが非常に高い人気を持つスポーツである。

ハイチ共和国
面積:27,750平方キロメートル(北海道の約1/3程度の面積)(世銀)
人口:1,158万人(2022年 世銀)
首都:ポルトープランス
言語:フランス語、ハイチ・クレオール語(共に公用語)
元首:大統領(任期5年)。ジョヴネル・モイーズ大統領が2021年7月に暗殺され、空席。
議会:二院制(上院30議席、下院119議席)。
(注:2019年以降、議会選挙が実施できておらず、2020年1月に下院議員全員、上院議員20名が任期切れとなり、また、2023年1月に残る上院議員10名も任期切れとなった。)

参照:外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/haiti/data.html>

ハイチ共和国
取材/ハイチ共和国大使館
(港区東麻布)

Republic of Haiti



ハイチ北部カプ・アイシアンにある聖母被昇天大聖堂は17世紀に建てられた美しいカトリック大聖堂

ワシントンD.C.で22年間、外交業務に従事された経済学と国際公共政策の専門家

ジョセフ大使は2025年に駐日大使として任命され、ここ麻布の地に着任された。日本への赴任は2度目で、長い外交キャリアと経済の専門性を持つ親日大使でいらっしゃる。取材中は日本に対して深い敬意と感謝の念をお示しいただき、さらに母国の経済的発展のために投資や情報提供にご尽力されているジョセフ大使の一言一言に大きな魅力を感じ、深い感銘を受けた。

ハイチの国旗の由来

ここでハイチの国旗について触れてみたい。「青と赤の二色旗」に中央の白い四角形の中に「自由の象徴」である国章(パームツリー・大砲・旗など)が描かれているというのが最大の特徴だ。パームツリーはヤシの木のことで、ハイチの生命力と自由を象徴している。

一方でテニスは決して主流ではないが、大坂なおみ選手の父、レオナルド・フランソワさんはハイチ系アメリカ人。故郷である南部のジャクメルには、昔からテニス教育の伝統が脈々と受け継がれている。こうしたジャクメルのテニス文化を信じ、娘をテニスの道へと導き、その才能を信じて育て上げた父親、フランソワさんの先見性と情熱は、極めて称賛に値する。

教育を通して若者の支えになりたい

教育支援については、とりわけジョセフ大使が最も重要視されている分野の一つだ。特に、0歳から35歳までの人口が全体の約65%を占めているハイチにおいて、未来を担う若者への期待は非常に大きいものがある。それゆえ上智大学や創価大学を訪問され、比較的学費の負担が少ない日本の大学への受け入れについて検討されている。そして将来、ハイチの発展に携わる人材となることを心より願われている。

また、ハイチと日本はハリケーンや地震など自然災害に遭うケースが多いという共通点を有する。2010年の地震の際は、日本が最初にチームを派遣し寄り添ったことに対して、ジョセフ大使は深い感銘を受け、その感謝を今も忘れていない。

さらに日本との文化交流だけでなく、食文化の面でも興味深い特徴が見られる。独立記念日である1月1日に必ず食される「自由の象徴」とされる、かぼちゃをベースとしたスープ・ジュム(Soup Joumou)は、世界的にも広く知られる料理。その背景には伝説的な歴史が存在する。これはか

つて食べることを許されなかった人々が、自由を勝ち取り、初めて味わうことができた希望の象徴ともいえる物語である。

東京でスープ・ジュムをいただける場所について尋ねると、「それなら、ぜひうちにいらしてください」とおちゃめな一言で、場は和やかな笑いに包まれた。

また日本食についても言及し、「小鉢のような小さなサイズで少しずつたしなめる、ほどよいおもてなしですね」と評していた。

大切にしている価値観

最後に「私の任務は、親交を大切にし、関係を築き続けることです。そのためには、自分の気質を持ちながら国の代表として正しくメッセージを伝え、謙虚であることが重要です」と語っていた。

ジョセフ大使のお人柄と母国への深い思いが強く伝わってくる、印象深い取材だった。



かぼちゃをベースとしたスープ・ジュム(Soup Joumou)別名クワッシュスープともいう。ハイチの人々は新年1月1日に必ず食すスープ。



ハイチ風揚げ物、ジョンジョ(黒きのご)ご飯と一緒に揚げ魚が出される。マンゴーの木の下にのみ生きる「カリブのトリュブ」と言われるのが黒いきのこ、ジョンジョ。戻し水を使ったピラフは真っ黒になる。



ハイチ唯一の世界遺産、シタデル・ラフェリエール。ハイチ北部、標高約970mのラ・フェリエール山の山頂に築かれた石造りの要塞。大砲や砲弾が今も残されている。



シタデル・ラフェリエールと共に世界遺産に登録されているサンスーシ宮殿。ヴェルサイユ宮殿をモデルとしている。1813年完成のお城。



ハイチ北部の港湾都市カプ・アイシアン沖にある観光スポット ラット島。



ジャクメル南東の山奥にある「バッシン・ブルー(Bassin Bleu)」は、滝で繋がっている自然のプールが魅力的な景勝地。滝壺を巡るトレッキングが観光客に人気。



港区・麻布地区の 認知症サポートを知ろう

ザ・AZABU第33号で認知症カフェ「みんなとオレンジカフェ」を紹介して10年が経ちました。医療や制度が進歩した現在でも、認知症の診断を素直に受け入れられなかったり、周囲の目を気にして一人で抱え込んでしまったりするケースは少なくありません。そこで今回は、地域で支え合う「みんなとオレンジカフェ」と「チームオレンジ」の取り組みを紹介します。本紙をきっかけに、港区から全国へ、温かい関心の輪がさらに広がることを期待しています。



寄稿

「みんなとオレンジカフェ」 地域で認知症のある方やご家族、認知症予防に関心のある方がつながるために

NPO法人介護者高齢者支援・けあポート 中島由利子

「最近もの忘れがあって気になるけど年のせいかしら？ 病院に行った方がいいのかしら？」

「認知症の家族を介護していて、迷うことや不安なことがあるけれど、皆さんどうしているのかしら？」

ある日の「みんなとオレンジカフェ」で、参加者同士で話されていたことです。

「みんなとオレンジカフェ」は平成26年に港区全地域(芝・赤坂・麻布・高輪・芝浦港南地域)で始まり、それぞれの地域ごとに、区民センターやいきいきプラザ、病院などを会場に、月1回(計5回/月)13:00～16:00の時間で開催しています。港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者相談支援係が主催で、NPO法人介護者高齢者支援・けあポートが運営しています。

「みんなとオレンジカフェ」の大きな特徴は、「医療機関連携型」と言われ、毎回、認知症専門医の先生が来訪し、30～40分ほど講話をしてくださることです。内容は認知症の症状や治療、予防、お薬について、家族の対応、終末期医療、睡眠についてなど多岐にわたります。また、個別相談の時間も設けています。お一人15分くらいで一日2人までですが、専門医から直接アドバイスをいただきほっとする様子も見られます。

各地域の高齢者相談センターからの紹介や、ふれあい相談員、ケアマネジャーさん、参加者からのお誘い、地域のボランティアさんからの紹介などで、しだいに参加者が

増え、ご夫婦で参加される方や、実の親を介護する娘さんの参加が多くなっています。参加者同士で情報交換したり、気持ちを共有したり、他の方のお話からヒントを得たり、自分一人ではないと安心したりと、各テーブルでお話が弾んでいます。

先輩の参加者や介護者が、新しく参加された方のお話を聴いたり相談に乗ったりということがカフェの中では行われています。介護者の方も認知症のある方も、孤立することなく、誰かとつながっているのを実感できる時間になっているのではないのでしょうか。人は人と関わることによって、気持ちや行動に少しずつの変化が生まれてくるようです。このような安心で居心地のいい場「みんなとオレンジカフェ」をこれからも関わる皆さんと一緒に創っていきましょう。

認知症に対する考え方は時代とともに変わってきました。今は、「認知症になっても、その人らしく地域で希望を持って生活できる」という「新しい認知症観」が提示されました。認知症は、年を重ねることが一番の原因と言われ、誰もがなる可能性があるといっても過言ではありません。認知症や認知症のある方に対する正しい理解を一人ひとりがちょっと心がけることによって、また自分事として考えることによって、いつまでも安心して暮らせる温かい地域がつくれると思っています。

「みんなとオレンジカフェ」に気軽に足を運んでみてください。新しいつながりや発見、気づきがあると思います。心地良く楽しい明日になるために、ちょっとした一歩を踏み出してみましょう。



カフェで楽しくお話タイム



ドクタータイム

まだまだある認知症の偏見をなくそう 認知症啓発漫画



制作 チームオレンジ・佐藤晴美

寄稿

「チームオレンジ」 地域の「認知症サポーター」が中心となる 認知症の支援をつなぐ仕組み

港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者相談支援係

チームオレンジとは、地域の認知症サポーターが主体となってチームを組み、認知症のある人やその家族とともに、困りごとなどの解消に向けて取り組むものです。認知症サポーターは、自治体や企業が実施する養成講座を受講することで誰でもなることができます。チームオレンジの取り組みは、地域によっては行政事業として実施されている場合もありますが、港区は、認知症のある人が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるよう、地域住民による自主的なボランティア活動として展開しています。

港区では令和7年度中の立ち上げを目指し、令和6年12月から定例会を開始しました。当初は具体的な活動内容が決まっていなかった中でのスタートでしたが、参加者が主体的に話し合いを重ね、「居場所づくり」「普及啓発」「想いをかなえる」の3つのチームが誕生しました。居場所づくりチームは、芝浦港南地区で「ふらっとオレンジスペース」を毎月開催し、いらした方の相談ごとをお聞きしたり、会話を楽しんだりしています。このような場所が麻布、そして港区に広がってほしいと思っています。

令和8年度からは港区が事務局としてチームオレンジの活動を支える立場で関わっていますが、活動の主役は地域のボランティアの皆さんです。港区では今後も、「認知症になっても安心して暮らせるまち」の実現に向け、地域の方々とのつながりを大切に、ともに支え合う地域づくりを進めていきます。



チームオレンジの薬局の「ふらっとオレンジスペース(居場所づくり)」

問合せ先

●みんなとオレンジカフェ
港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者相談支援係
電話／03-3578-2407
●チームオレンジ
港区保健福祉支援部高齢者支援課高齢者相談支援係
電話／03-3578-2316

今後のプログラムより

●みんなとオレンジカフェ
開催日時／9月9日(水)、10月14日(水)
開催時間／13:00～16:00
場所／ありすいきいきプラザ3階 敬老室

アートな麻布に 魅せられて

麻布の家紋

番外編

長門長府藩



毛利家 家系図

松溪妙寿<妙寿院>
(継室もしくは側室)

毛利元就

妙玖(正室)

穂井田元清(四男)

毛利隆元(嫡男)

吉川元春(次男)

小早川隆景(三男)

毛利秀元

養子
(継嗣)

毛利輝元(嫡孫)

吉川広家

小早川秀秋(秀吉養子)

毛利秀就(嫡曾孫)

元就との続柄

息子

孫

曾孫

※毛利秀元と輝元は続柄上は従兄弟。

現在の六本木ヒルズ周辺に広大な上屋敷を構えていた「毛利甲斐守」の紋として記されているのが「長門沢瀉」。ザ・AZABU59号でも紹介された毛利庭園は、長門長府藩毛利家の上屋敷跡。毛利家というと兎角“長州藩”というイメージが先行しますが、長府藩は長州藩の支藩。「あれ？毛利の家紋は違うのでは…？」と思った読者もいらっしゃるかも知れません。今回はこの印象的な家紋から長府毛利家の歴史をたどってみたい。

ながと おも だか 長門沢瀉

毛利家といえば「一文字三星」が広く知られていますが(本家と分家で“一文字”の意匠を変えることで区別できるようになっている)、江戸期の毛利家一門では沢瀉紋も多く用いられました。毛利元就が戦に際し、沢瀉に止まったトンボ(勝ち虫)を見て敵に向かって進んだところ勝利を得たため記念として家紋にしたという逸話が残っています。

沢瀉はオモダカ科の多年草で、水田や沼地、沢などに自生する雑草です。均整の取れた鑑形(やじり)の葉と円錐状に白い3弁の可憐な花をつける。葉の形から“勝軍草”(かちいくさぐさ)とも呼ばれていることから多くの武家で使用された図柄でもあります。「沢瀉」と「三星」いずれが定紋か、という点については諸説紛々ですが、江戸切絵図(麻布絵図)にも示されている通り、オフィシャルなシーンではこの沢瀉紋が使われていたようです。

もうり ひでもと 初代藩主・毛利秀元

秀元は毛利元就の四男 穂井田元清の次男として天正7(1579)年に誕生しました。

父・元清は元就の息子ですが庶子のため、長男・隆元、次男・(吉川)元春、三男・(小早川)隆景の影に埋もれてしまいがちですが、戦国期の毛利家伸長に欠かすことのできない温厚篤実、(庶子兄弟の中でも)才覚にあふれた立派な武将であったと伝わります(元就には9男5女の子どもがいます)。秀元もまた祖父・父の資質をよく受け継いでいて、叔父である元春、隆景も高く評価していたようです。それ故に当時子どものいなかった輝元(元就の嫡孫)の養子(継嗣)となりました。その後、輝元に嫡子・秀就が誕生したため所領分知により長府藩を立藩しました。余談ではありますが、秀元の「秀」は豊臣秀吉からの偏諱で、正室は豊臣秀長の娘・大善院です。太閤様にもその才を愛でられていた、という証ですね。



長門三星(長州藩)



府中三星(長府藩)



徳山三星(徳山藩)

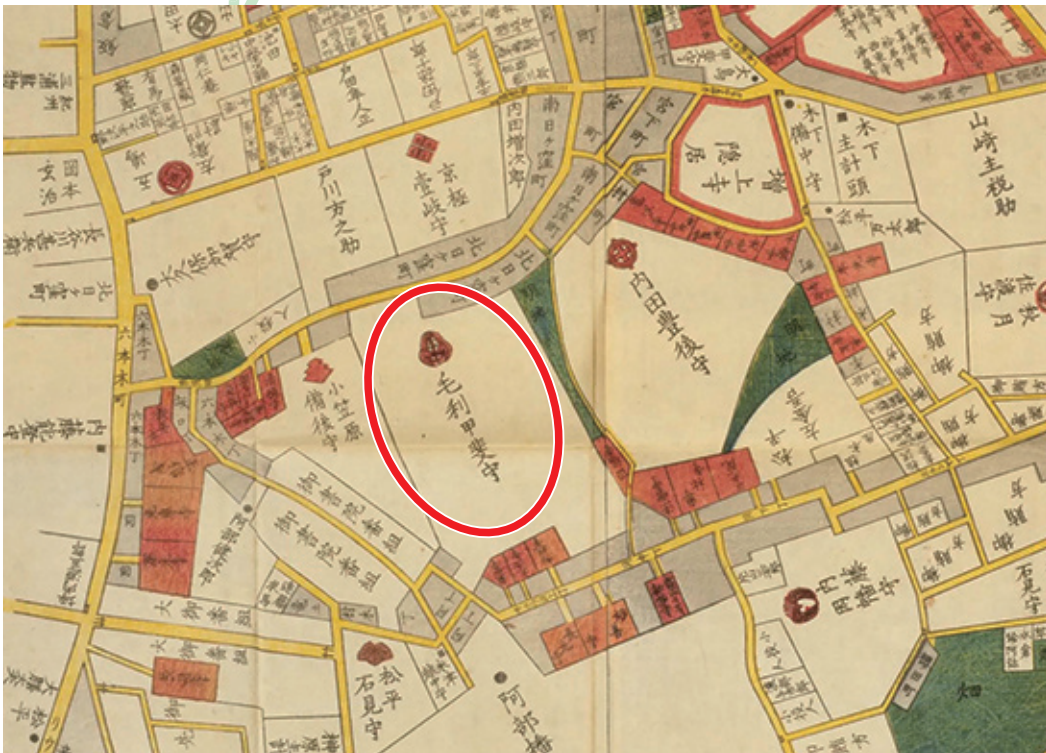
一文字の意匠も三星の置き方も各藩違いがあります。

麻布の毛利

実は秀元の子孫は宗家長州藩主を継いでいます。だから、という訳ではありませんが長府藩上屋敷周辺には長州藩下屋敷(現在の東京ミッドタウン)や徳山藩上屋敷(赤坂8丁目周辺)、岩国藩中屋敷(赤坂8丁目乃木神社横)があります。『三矢の訓』(俗に“三本の矢”という元就公の残した教訓)の通り「毛利家一門結束を固めて」という訳ではないですが、これだけ近所に一門藩邸が揃っていることも珍しいです。昔日の屋敷並びを探ってみることで何か新たな発見があるかも知れません。



現在の毛利庭園(令和8年6月撮影)



東都・麻布之絵図に沢瀉紋が明示されています。「甲斐守」は長府藩歴代藩主の官職名となりました。

●取材協力
長府毛利邸(指定管理者:一般財団法人下関市公営施設管理公社) URL: <https://www.s-kanrikousha.com/mouriteitop.html>

●参考文献
沼田頼輔『綱要 日本紋章学』(新人物往来社) 1977年発行
高澤等『家紋の事典』(東京堂出版) 2008年5月16日初版発行
高山優『長門長府藩毛利家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』(東京都港区教育委員会) 2004年3月25日発行
景山致恭、戸松昌訓、井山能知//編『江戸切絵図』麻布絵図、尾張屋清七、嘉永2-文久2(1849-1862)刊。国立国会図書館デジタルコレクション

(取材・文/田中康寛)



麻布の軌跡

麻布に私邸を構えた弁護士

増島六一郎（前編）



イギリス法廷
弁護士の法衣と
白巻毛のカツラを
纏った若き増島六一郎。



この東京府神田区神田錦町の校舎は
1892(明治25)年に神田大火で全焼、再建
された新校舎も1917(大正6)年失火で全
焼、さらに再再建された新校舎も1923大
正12)年(関東大震災)で3度目の焼失。

現在の六本木ヒルズ内のテレビ朝日東京本社や毛利庭園の一帯は、明治、大正、昭和にかけて、法曹界の重鎮、増島六一郎が5,500坪の敷地を所有し、私邸を構えていた。芳暉園と名付け、敷地内には法律書の私設図書館(正求律書院)なども設立していた。

その様子を伝える資料が残され写真等も現存している。まず前編では増島がどんな人物であったか、来歴及び功績について詳しく語りたい。

増島六一郎の経歴 「1857(安政4)年～1948(昭和23)年」

増島は彦根藩(井伊家)藩校弘道館で神童と謳われ、開成学校(東大の前身)から東京大学法学部へと進み1879(明治12)年首席で卒業する。

「自分の必要とする人物は自分でつくる」という主義者の三菱の創業者岩崎弥太郎の支援を受け、英国の代表的な法曹院ミドルテンブルに留学する。1883(明治16)年 Barrister at law の称号を受け、法廷弁護士となった。これは穂積陳重、岡村輝彦に続く快挙であった。後にこの2人は、増島とともに英吉利法律学校(中央大学)を創立する。増島は後に国際人としても活躍したため、ミドルテンブルには日本人として唯一、彼の肖像画が飾られている。

1884(明治17)年に帰国し、訴訟事務を扱う者を対象とした代言人規則(1876(明治9)年制定、免許を得た者以外は代言が許されなかった)に従い代言免許を取って法律事務所を開業する*。代言人制が廃止され弁護士の名称が採用されたのは、1893(明治26)年である。さらに弁護士が法律事務を独占できるようになったのは、1933(昭和8)年のことである。代言人の真の法律家への道を切り開いたのは増島等の力であったろう。

*当時英国では弁護士が紳士として高い尊敬を受けていた。一方日本では三百代言と揶揄されるような代言人がいて社会的評価はよくなかった。

英吉利法律学校(中央大学)の開設

増島は、イギリスから帰国後の1885(明治18)年、東京大学法学部又はその前身の東京開成学校で英米法を学んだ仲間たち18名(海外留学組5名、官僚7名、弁護士6名)とともに英吉利法律学校(中央大学)を創立し初代校長となる。彼らは1880年前後に日本で最初にイギリス法を修得した若きエリートたちであり、創立時には全員が25～32歳という若さであった。

明治期の教育の目的は、西洋の新しい知識を実践することであった。これは法学にも当てはまる。その頃、日本は諸法典が整備されたフランス法が主流であった。ただフランス法は、法典主義であるのに対し、英米法は判例法主義であった。

19世紀の世界にあって模範国とされた英国では、実社会と密接に結びついた判例法主義をよりどころにしていたので、イギリス法を学ぶことが日本の国情にあった司法制度の構築に繋がるが増島始め創立者たちは考えたのである。つまり、外国由来の条文が日本の実情を無視して実施されることに抗い、現実根ざした法学の普及が日本の近代化に必要と考えたのである。

米国公使や英国領事を招いた開校式で、日本語より英語が得意といわれた増島校長は、英語で話し、英米法教育、書籍の刊行、書庫の充実という3つの目的を明らかにし、また政府とは独立した道を歩むことの決意を語った。さらに人格の陶冶と法律を学ぶ者の社会的責任についても説いた。来賓の福沢諭吉は「人間必須の学問である法律を深く学ぶことを望む」と挨拶している。1889(明治22)年、辰野金吾設計の新校舎が落成した折、落成式でも増島は法律を学ん



増島私邸内の水草に覆われた池が現在の毛利池と呼ばれているあたり。

だ者の社会的責任について語り、「新憲法の奴隷となるのではなく権利の擁護者となれ」と語った。大日本帝国憲法が公布されたのはその4日後のことである。

増島の教えと国際的活躍

増島の教えに「実地応用の素を養う」即ち「知識をただ覚えるだけでなく社会に役立つ力を養う」がある。増島のその確固たる信念は、後に、見識が高く品格ある人材を多く輩出することになる。

増島は何事に対しても近寄り難い程の理論を徹底しなければ止まらない人柄であったらしい。こんなエピソードもある。依頼人相手の深さ近さに関係なく請求書を送りつけたり、靴のまま玄関に上がってきた訴訟依頼人の外国人を外に追い出したりと気骨のある人物だったのだろう。後に増島の子孫は頑固一徹の人だったと述べている。

増島が法律事務所を開設した折、英国法廷弁護士の資格を持つ人は稀で、まして英語が出来る代言人はさらに稀だった。代言人の間での名声は高く、国際性あるビジネス訴訟や大企業法務を扱った。その多大な業績と名声により全米弁護士会、カナダ弁護士会、ニューヨーク弁護士会の名誉会員となったのである。

※芳暉園や正求律書院等の詳細は後編に譲る。

増島邸が六本木ヒルズ敷地内にあったことを筆者が知ったのは、六本木ヒルズ完成の折、大学の後輩で増島大先輩と同じ彦根(滋賀県)出身の福原紀彦氏(元中大総長、前学長、現日本私立学校振興共済事業団理事長)との会話の中であった。



1935(昭和10)年に竣工した神田駿河台中央大学講堂で1955(昭和30)年新党結成大会が挙行され自由民主党が誕生し、この講堂で日本社会党との55年体制の幕が開かれた。

1926(大正15)年神田駿河台に移転し最初に竣工した中庭のある校舎(名称2号館)。大学紛争の中、学生運動家がゲバ棒(角材)を持って正門からこの中庭を抜け、教室に雪崩れ込んできた折、「俺達は、学びに来てるんだ。帰れ!」と叫んで仲間たちと一緒に彼等を追い出した記憶が蘇る。



1978(昭和53)年多摩移転に伴い、この2つの建物を含む多くの中央大学神田駿河台校舎群が全てが取り壊された。

- 参考文献●
『図説 中央大学 1885⇒1985』学校法人中央大学、1985
『中央大学百年史 通史編 上巻』学校法人中央大学、2001
『中央大学創立125周年記念展示図録 学びのたから 中央大学の起源・絆・記憶』学校法人中央大学、2011
『タイムトラベル中大125』学校法人中央大学、2010
『中央大学140年のあゆみ 中央大学創立140周年記念史』学校法人中央大学、2025
『慶応義塾百年史 中巻(後)』慶応義塾、1964
冬湖學人『超然兒 増島六一郎』1936年
増島六一郎『芳暉園記』
『米國有力法曹提唱の特殊學園設立につき同志に懇ふ 附記「東京麻布増島邸由來記」』小塚貞義、1937年
「初代校長 増島六一郎(2006年度制作)」中央大学公式YouTube
●取材協力・資料・写真提供●
中央大学資料館事務局

(文/鍵谷芳勝 取材/鍵谷芳勝、田中亜紀)



都税事務所からのお知らせ



固定資産税・都市計画税の現所有者申告制度について(23区内)

現所有者申告制度は、土地・家屋の所有者が亡くなられた場合、相続人など新たに所有者(現所有者)となった方から、3か月以内に、ご自身が現所有者であることを申告していただく制度です。制度の詳細は、東京都主税局HP又は下記問合せ先へ。

また、土地・家屋の所有者が亡くなられた場合は、早めの相続登記をご検討ください。

お問合せ／港区にある物件について
電話／港都税事務所 03-5549-3800(代表)

令和8年度の固定資産税・都市計画税の 軽減措置の継続についてお知らせします(23区内)

①商業地等に対する固定資産税・都市計画税の負担水準の上限引下げ減額措置②小規模非住宅用地に対する固定資産税・都市計画税の減免措置③小規模住宅用地に対する都市計画税の軽減措置④耐震化のための建替え又は改修を行った住宅に対する固定資産税・都市計画税の減免措置⑤不燃化特区内における建替え又は老朽住宅等除却土地に対する固定資産税・都市計画税の減免措置については、令和8年度も継続します(④⑤については適用期限を令和12年度末まで延長)。詳細は、東京都主税局HP又は下記問合せ先へ

お問合せ／港区に所在する土地・家屋について
電話／港都税事務所 03-5549-3804(固定資産税班)

不動産登記申請時には課税明細書がご利用いただけます

不動産登記の申請を行う際には、登録免許税の算定のため、固定資産の価格を記載する必要があります。その価格は、「固定資産税・都市計画税 納税通知書」と一緒(6月)にお送りする、課税明細書でご確認いただけますので、有料の評価証明は原則不要です。詳しくは東京都主税局ホームページをご覧ください。

https://www.tax.metro.tokyo.lg.jp/shitsumon/real_estate/o#o31

中小企業者向け省エネ促進税制 ～法人事業税・個人事業税の減免～

東京都では、中小企業者が行う省エネ設備等の取得を支援するため、法人事業税・個人事業税を減免しています。

詳細は、東京都主税局HP「環境に関する都税の軽減制度について」をご覧ください。

お問合せ／中小企業者向け省エネ促進税制について

所管の都税事務所又は支庁の各税目担当

主税局課税部(法人) 電話／03-5388-2963

主税局課税部(個人) 電話／03-5388-2969

地球温暖化対策報告書制度・導入推奨機器について

地球温暖化対策報告書制度 受付窓口 電話／03-5388-3433

導入推奨機器 電話／03-5990-5087



みなと芸術センターの可能性を“こねる”対話の場 「m~mこねこねミーティング 第3回 in 麻布」参加者募集!

2027年11月、港区の新たな文化芸術拠点「みなと芸術センターm~m(むーむ)」が浜松町駅前に誕生します。開館に向けて、m~mについて知り、体験したいもの、やりたいことについて、みんなで自由に“こねる”対話の場「m~mこねこねミーティング」の第3回目を、麻布地区で開催します。

当日は、m~mの施設概要の説明や対話の時間に加えて、ゲストをお迎えしたトークやミニワークショップなども行う予定です。

m~mについて知りたい人、日常に芸術鑑賞や芸術活動をプラスしてみたいと考えている人、芸術を通して地域の人とつながりたい人など、是非ご参加ください。どなたでも参加できるイベントです。



日程 2026年8月29日(土)14:00 ~ 16:00

※前後60分間で、VR体験及び質問コーナーあり

会場 麻布区民センター 地下1階 区民ホール
(〒106-0032 港区六本木5-16-45)

対象 どなたでも(小学生以下のお子さまは保護者同伴)

参加費 無料

定員 30名

参加方法 申込みフォームまたは電話にてお申し込みください

※事前申込制／先着順(定員に空きがある場合は当日参加も受付)



「m~mこねこねミーティング
第3回 in 麻布」の詳細は
こちらからご覧ください。

お問合せ／みなと芸術センター開館準備室
電話／03-6809-3631(平日9:30 ~ 17:00)

～未来のまちづくりの主役が送る、麻布探検レポート～ こどもミナヨク

子どもの視点でまちの魅力を再発見する機会を創出し、地域への愛着を育み、次世代の地域の担い手を育成することを目的とした企画です。

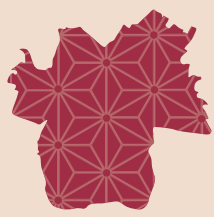
麻布(AZABU)を舞台にした冒険(ADVENTURE)を通じて、子どもたちが「まちづくりの主役」としてデビューする参加型の掲載です！ぜひお楽しみください。



港区麻布地区総合支所だより



みんなのアイデアでまちを変える～令和8年度「みんな」でまちを「よく」する『ミナヨク』メンバー募集～

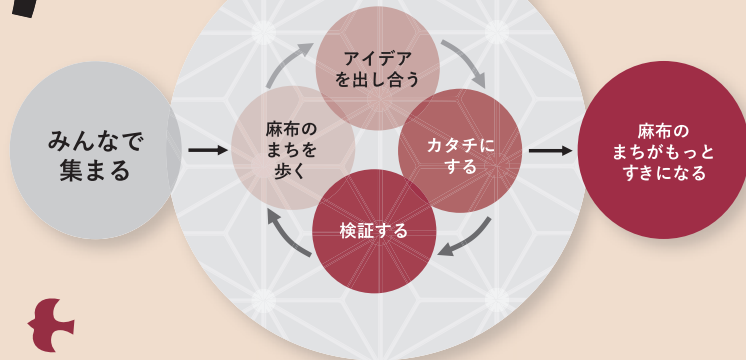


OPEN
ミナヨク
みんなでまちを良くする

ミナヨク
“メソッド”

ミナヨクでは、「麻布」というまちを学び知り、地域の課題解決に向けたアイデアを出し合い、自らが主体的に地域に関わることで、「麻布」への愛着を育みます。

麻布のまちを良くする



地域を学び知る

地域住人と話し、自らの足でまちを歩き、五感を使って地域の良いところ、改善すべきところを探す。

愛着を育む

地域の課題を参加者で探し、課題解決のアイデアを考え、実行する。地域に向き合い、関わることで地域を好きになる。

これまでの取組

令和7年度までに約150名のメンバーにより、フィールドワーク、様々なゲストとの対話、地域課題解決のためのアイデア検討、発表等を実施しました。



麻布を知る

フィールドワークや地域行事への参加や準備・片付けに関わることで、地域の課題や地元の人たちとの接点を見つける。



対話する

麻布に興味・関心を持つ人たちと対話を重ねることで視野を広げ、「麻布をみんなでよくする」アイデアを膨らませる。

アイデアを生み出す

麻布で小さな活動をスタートした人たちが、暮らしを楽しんでいる人たちからヒントを探る。



伝えてみる

仲間とともに企画を発表。「もっとよくなる」活動スタート！



令和8年度『ミナヨク』メンバー募集のお知らせ

～仲間とのアイデア出しやフィールドワークを通じて地域の活性化に取り組む人材を募集します～

開催場所 麻布区民協働スペース

対象 ●原則、麻布地区に在住・在勤・在学している方

- まちの活性化に取り組む意欲のある方
- 麻布での地域活動に興味のある方
- 基本的に全日程参加可能な方

(全6回でひとつのプログラムとなります)

※就学前のお子さんの一時保育が必要な方はご相談ください

定員 10名程度

参加費 無料

応募方法 ミナヨクホームページの応募フォームからお申し込みください

応募期間 令和8年7月22日(水)まで

ミナヨク
ホームページ



開催日程(予定) ※原則、全日程にご参加ください

Day1	令和8年9/5(土)	13:00～17:00	オリエンテーション
Day2	" 9/19(土)	13:00～17:00	キックオフミーティング
Day3	" 10/3(土)	9:00～17:00	まちなかフィールドワーク
Day4	" 11/7(土)	13:00～17:00	各自フィールドワーク・企画検討
Day5	" 12/5(土)	13:00～17:00	各自フィールドワーク・実証計画
Day6	令和9年1/16(土)	13:00～17:00	最終発表会

お問合せ／麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当

電話／03-5114-8812 FAX／03-3583-3782



令和8年度 港区総合防災訓練(麻布会場)を実施します

過去の災害の教訓を踏まえ、今後発生が懸念される首都直下地震等の災害に備えるために、港区総合防災訓練(麻布会場)を実施します。



対象 どなたでも

参加費 無料

申込み 不要です。直接会場にお越しください。

日時 令和8年10月25日(日) 9:30～11:30 予定

場所 港区立六本木中学校(港区六本木6-8-16)

詳細は東京都港区【地域情報】のX、麻布地区総合支所協働推進課のInstagramをご確認ください。

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課 電話／03-5114-8802



フォローをお願いします！



港区の地域情報をX(旧Twitter)で、麻布地区で開催されるイベントや地域の出来事など様々な話題をInstagramで配信しています。



©AZABUKYUODOU

東京都港区【地域情報】



各支所では、地域情報紙(情報誌)

- 芝地区総合支所「しばタグ」
- 高輪地区総合支所「みなとつぐ」
- 麻布地区総合支所「ザ・AZABU」
- 芝浦港南地区総合支所「べいあつぐ」
- 赤坂地区総合支所「MYタウン赤坂・青山」

を定期的に発行しております。支所内各戸配布のほか、港区立図書館(高輪図書館分室を除く)・各いぎきプラザで閲覧可能です。

ザ・AZABU

●配布設置場所ご案内
六本木一丁目、六本木、広尾、麻布十番、赤羽橋の各地下鉄の駅、ちいばす車内、港区立図書館(高輪図書館分室を除く)、各いぎきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所、港区観光インフォメーションセンター等
●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

編集後記

「ザ・AZABU」編集委員となって初めて編集後記を書かせていただきます。紙面づくりのための編集会議は、麻布地区総合支所の会議室に編集委員が集まり、オンライン参加も交えながら毎号さまざまな企画が練られています。中には、企画立案から取材、掲載まで一年以上温め続けてきたテーマもあり、メンバーそれぞれの紙面づくりへの熱意とこだわりが感じられます。麻布愛あふれる編集委員たちが執筆した記事を、ぜひお楽しみください。
(佐藤正子)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします！

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休／午前8時～午後8時 ※英語での対応もいたします。

電話／03-5472-3710 FAX／03-5777-8752
お問合せフォーム／<https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form.html>

“Minato Call” information service
Minato call is a city information service, available in English every day from 8a.m.～8p.m.

Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752;
Inquiry submission form: <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form-inquiry.html>



港区は80周年を迎えます